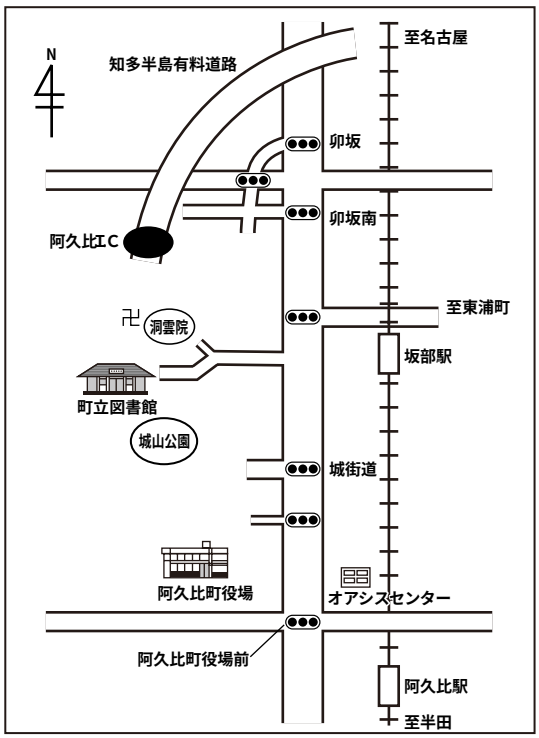
シリーズ 阿久比を歩く㊶

あぐいぶらり旅

施設かいわいを行く（町立図書館）



本を読む子どもたち

昭和五十八年七月の開館以来、多くの人に利用される〝情報発信の基地〟町立図書館かいわいにぶらり出掛けた。

―徳川家康の生母於大の方は家康を生んだ後、天文十六（一五四七）年坂部城主久松俊勝と再婚。政略結婚のため幼い息子と離ればなれとなる。家康は桶狭間の戦いを控えた永禄三（一五六〇）年、於大の方に会うため坂部城に立ち寄ったと言われる。―

歴史の舞台となった坂部城跡の静かな場所に図書館は建つ。

坂部城跡の石碑が残る城山公園に立ち寄る。「シャー、シャー。シャカ、シャカ」夏の風物詩、セミの鳴き声がにぎやか。タモで木に止まるセミを取る親子の姿がほほ笑ましい。公園の西から図書館の玄関に回る。

図書館の屋根は城跡にちなみ、城を連想させるような瓦ぶき。昭和六十二年には斜面を生かした小規模図書館として、日本図書館協会建築賞「特別賞」にも輝き、落ち着いた感じのデザインである。

図書館に一歩足を踏み入れる。エアコンの入った館内は実に気持ちがいい。一度に汗が引く。

「暑い夏、外からエアコンの効いた場所に入ったときは、『きたぁー』って感じですよね」。ちまたで、はやりのギャグを交えて友人が話し掛けてくる。私は人差し指を立て、口元に近づけて「しぃー」と注意を促す。

図書館では大きな声でしゃべることは厳禁。友人はそのことに気付き、それからは小声でしゃべるようになる。

瓦ぶき屋根の図書館

絵本や子ども向けの本が並ぶ児童室は、夏休みで子どもたちがいっぱい。読書が自由にできる閲覧室では大人たちが静かに本を読む。窓の外を眺めると公園や竹やぶの緑が取り囲む。雑音の多い社会で、日々忙しく生活を送る人にとっては、ゆっくりと自分の時間が過ごせる「最適空間」だ。

図書館を出る。『次郎物語』の主人公の勇気ある行動に感動を覚えたし、『黒い雨』を読み終えた後の切なさは何とも言えなかったなあ。ところで君の思い出に残る本は？」と友人に問い掛ける。「恐竜が出てきて、あれですよ。えっと・・・。書名を度忘れしました」。「どこがおもしろかったの？」。「・・・・」。「本当に読んだの？」。「感想文を書いた覚えがありますから確かに読みました」。友人の額から大量の汗が流れていた。